

---

# オープンドシール

鳴鐘新都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オープンドシール

### 【Nコード】

N5764Z

### 【作者名】

鳴鐘新都

### 【あらすじ】

善き神と悪しき神が空の星達の支配権を巡って果てしない争いを繰り広げたのも今では昔のこと。

争いの末に善き神は冷たい場所に悪しき神を封じ込め、その上に蓋をするように

この世界を創ったとされている。

善き神の封印は悪しき神から魔法の力を吸い出し世界を豊かにするはずだったが

悪しき神の置き土産である怪物が魔力湧く泉である【冷孔】の元に

居座り続けていた……

そんな御伽噺のような伝承の残る異世界・パラダイムがあることなど知らず

現代の日本から落ちてきた熱血高校生桜田雪平の人生は一変する。彼を待つのは戦いと旅の日々、そして仲間との出会い。

雪平は銀髪紫眼の美形青年剣士ヴァイスに出会い、故郷への帰還への鍵が

この世界の英雄三人が嘗て解放した残り7つの大冷孔に有ると知る。

雪平はヴァイスに同行、師事を仰いで魔物と怪物を狩り

冷穴を解放する職バスターになる事を決意する。

頼るべきはチートなどではなく己の心、鋼の魂の冒険活劇。

彼の故郷はまだ遠い。

## プロローグ（前書き）

異世界トリップものです。

暇つぶしくらいの軽い気持ちで読んでいただけると幸いです。

## プロローグ

「……いてえ」

学校の帰りに突然目の前が真っ暗になったかと思うと次の瞬間には背中に物凄い衝撃が走った。

あたりは妙につんとする黴と木の匂いが鼻を衝く。

「おい、お前大丈夫か？」

声をかけられた。よく通る男の声だ。

声の主を探すとそこには妙な男が居た。

年のころは二十代だろうか？

顔立ちその物は美形。だが格好と眼と髪が奇妙だ。

長めの銀髪に紫の眼。それになにかのRPGや漫画の登場人物のよう  
うな

黒の鎧に腰に帯びた剣。

「くっそ……これが大丈夫に見えるかよ……」

「立てるか？手を貸すぞ」

謎のコスプレ野郎に腕を貸されて立ち上がる。

「ありがとう、助かったぜ……でも一体全体何がどうなって……」

体中に木片やコケやら何やらがついているのに気づき叩き落とす。

「どうやらお前はあそこから落ちてきたようだぞ」

落ち着き払った態度の男の指差す方向を眺めると

なんと言つか余り受け入れたくない光景が見えた。

俺の住んでいた日本の街の何処かなどいう可能性は今この瞬間消え  
うせた。

青い空、茂る森の木々の中に立っているのは俺が背中から落ちたら  
しき建物。

打ち捨てられた礼拝堂や教会のような感じで、屋根の一部が凹んで  
いる。

……明らかに俺の落下の痕跡だろう。

「……マジか……冗談きついぜ……ここ何処だよ……」

背中から落ちた落下の傷の痛みすら忘れるほどのショックだ。

これがいわゆる神隠しってやつなのか……

男らしくないが俺は頭を抱えて情けなく呻くことしか出来なかった。

「……お前運が良いな」

突き放したような響きのあるよく通る声で謎のコスプレ野郎が呟いたので切れそうになった。

「どこがだよ！」

「お前を見つけたのが俺じゃなく野盗や怪物の類ならお前は死んでる」

こいつの冷徹とも言える斬って捨てるような言動

事実と現実だけを直視した言い方に俺は確かな真実の匂いを感じて背筋が寒くなった。

「……いるの？野盗とか怪物とか聞き捨てならない言葉がきこえたんすけど」

コスプレ剣士は何言ってるんだこの阿呆は、というような態度で髪をかき上げながら答えた。

「……居るに決まっているだろう。お前は何処の平和な国から来たんだ？」

ああ……いつまでもお前では具合が悪いな。名前は？」

さくらだ ゆきひろ

「桜田雪平。あんたの名前は？」

「耳慣れぬ響きだな。俺はヴァイス」

端的にそう言ったコスプレ野郎……いや、もうコスプレ野郎と思うのはよそう。

一応落ち着いてヴァイスを観察する余裕が出てきた。

鎧についた細かい傷に小さな汚れ。身に帯びた剣や鎧はどう見ても使い込まれている。

コスプレじゃなく実用品として使わなければこうはならないだろう。それに身のこなしもそうだ。何かの武術をやっているように思える。俺も少しだけ心得があるからなおさら良く分かる。

ドッキリでもコスプレでもなくどうやらここは本当に訳の分からな  
い異世界らしい。

「……行く当ても無え、金もねえ、帰れるかどうかもわからねえ。  
何でこうなった。俺の未来も明日も全く見えねえ」

打ちひしがれて地面に手をつきがつくりと気落ちする俺に  
ヴァイスが深いため息をついた後声をかける。

「……見捨てるのは簡単だが、それは余りにも安易すぎだな。  
このままでは確実に野垂れ死ぬな、それも面白くない。

雪平、なんとかしてやるからついてこい」

やべえ、この人かっけえ……

人情が身にしみる……涙出てきそうだ……

コスプレ野郎なんて思ってたすいませんでした。

「すいませんよろしく願いますヴァイスさん！」

「ヴァイスでいい。さんは要らん。

ああ、生活が安定してきたらちゃんと掛かった費用は請求するから  
な」

しっかりしてるなあ……

いや、それでも十分ありがたいけど。

## プロローグ（後書き）

チート無し、転生無し。

これでも異世界トリップ難易度：ドM 難易度：ルナティックには遠い。

主人公には「有情」だと思っていたきたい。

チートも無い。転生による強くてニューゲームもない。言葉も通じない、誰かが助けにも現れないのが真のリアル異世界トリップだ。



## 第一話・郷愁、そして示された目的

俺がこの謎のファンタジーな世界に流れ着いてもう何キロ歩いただろうか？

正確なところは少しもわからない。

整地されていない森を歩くことなど初めての経験で

何度も足をとられて躓き、木々から生える小枝に引っかかれ

足元に生える草の棘に皮膚を刺された。

体は鍛えているつもりだったが慣れない事が重なりすぎて

足は疲労でガクガクだ。

ああ、ベッドで眠りたい……

夕方になった頃森を抜けて少し開けた丘のところでヴァイスが口を開いた。

「近くに水場もある。今日は此处で野営するぞ」

「ういゝす……」

ヴァイスは俺に小さなナイフを差し出してこう命じた。

「このあたりの草を刈って寝る場所を作るんだ。」

小さな石とかも取り除く」

それからヴァイスと俺は二人で草を刈って石を取り除く作業に没頭した。

なんとかその作業を終えて座り込んでいると

ヴァイスは荷物から文字が刻まれた杭のようなものを取り出し

地面に幾つも打ち込んでいく。ちょうどいましがた作った空き地を囲うようにだ。

「なんすかそれ？」

「虫除けと獣避け、警戒の式が刻まれた結界を作ってるんだ」

端的にヴァイスはそう説明した。

「……そっすか」

やっぱり魔法もあるんだ。

原理を尋ねたり効力に懐疑を示す余裕は今の俺には無い  
まったく……ファンタジー過ぎて困るぜ……

それから二人で設営を完了させ

ヴァイスの煎れてくれたむやみやたらと苦いお茶のようなものを飲んで

体を温めながら火を囲むことでようやく俺は人心地つけた。

「あゝ帰れてえなあ……」

我ながら情けないと思いつつしみじみと俺は呟いた。

単調で機械的な学園生活の中で馬鹿なことをする。

日本で高校生をやった時はこれほどつまらないものは無いと

思っていたのだったが、いざ全く取っ掛かりの無い世界に放り出されて

初めてありがたみが身にしてみた。

平和も退屈も結構なことじゃないか。

コンクリートで海も川も大地も固められて鉛色の陰鬱な空

薄汚れていても、やはり故郷は故郷で楽しい事や美しいことも確かにあそこには有ったのだ。

だが今俺の眼に映るのは自然で一杯のクソッタレファンタジーの夜の闇ばかり。

文明の光などありはしない。

しかも怪物や追いはぎなどという現実味の無いものが跋扈する危険な闇だ。

「帰りたい、か。そうだな……故郷はいいものだ

それがどんな厳しい所であろうとも……」

ヴァイスから意外な一言が聞けた。

自分でも正直情けない事を言っただけと思うし

てつきり何か斬って捨てるようなことを言われると思ったのに予想外だ。

「意外だな……俺、てつきり甘えるなみたいなことを言われるかと思っただけ」

「お前は迷って此処にきたのだろう？誰だって心細いはずだ。それに俺だって故郷に帰る事を目指しているんだ。七つの【大冷孔】を解放し、遙か遠い故郷に帰る」

物憂げにヴァイスはそう呟いた。

悔しいがいやしかし絵になるなこの男イケメンすぎるだろ。

ちよつと現実離れした美形だ。

その物憂げな表情だけで女の子が放って置かないだろう。

向こうの世界ならそのままアイドルや俳優でもやっていけるだろう  
なと思う。

それはそうと俺は思った疑問を口にする。

「大冷孔ってなんだ？」

ヴァイスが本当に驚いたような表情を形作る

「本当に知らないのか……？お前は何処から来たんだ？」

「日本だよ！につぼん！ああ、こつちじゃ通じないかもしれないな

……

えーと、チキユウの日本！テラ！アース！ガイア！」

俺は思いつくがままにそれっぽい世界の名称を並べ立ててみた。

「……本気で言っているのか？」

ヴァイスはいぶかしげに眉をひそめた。

「え、なんか俺おかしい事言った？」

「地球も日本とやらも知らんがまさかガイアとは……」

「え。知ってるの！？」

「ガイアは彼岸、あの世だ。天上に有る死後の世界……魂の行く場所とされている」

「あの世……マジかよ……こつちの世界……あの世……

一体全体……此処はどうなってるんだ……」

「信じないわけではないが何処から来たかは吹いて回らないほうがお前のためだ」

「分かったよヴァイス……頭のやばい奴扱いされたくないもんな」  
「聞かれたら記憶喪失とでもしておけ」

「おう……で、大冷孔って何なんだ？」

「それを説明するにはこの世界の神話から始めなければならないな」

そいつってヴァイスは語り始めた。

善き神と悪しき神が空の星達の支配権を巡って果てしない争いを繰り広げたのも今では昔のこと。

争いの末に善き神は冷たい場所に悪しき神を封じ込め、その上に蓋をするように

この世界を創ったとされている。

善き神の封印は悪しき神から魔法の力を吸い出し世界を豊かにするはずだったが

悪しき神の置き土産である怪物が魔力湧く泉である【冷孔】の元に居座り続けていた……

「へー。なんか、聞いたことのあるような無いような……」

空の星たちの支配権？何か引つかかるんだよなあ。

似たような話をどつかで聞いたような……

「小さな規模の冷孔は山ほどあって、その傍に村があつたりするな。地上にはびこる怪物退治や冷孔に居座る大物の怪物を退治する職業

【バスター】は今も引く手数多だな

功績によつては栄達、栄耀の道が開けるし貴族になれることもある」

「なんとなくニュアンスで冷孔がこの世界で重要視されてるのは分かったけど何故なんだ？」

そして何で怪物が居座ってるのは分かったけど何してるんだ？どうして怪物をどけなきゃならない？」

「あー。そこも説明しないといけないか……いいか？」

冷孔を開放する利点の方から説明するとだな……

第一に冷孔の開いているところと閉じている所では土地の実りの豊かさが全く違うんだ。

それに冷孔から出た魔力だけじゃなく冷気は食料の保存に使える。

第二に魔法で出来ることが増えるんだ、冷孔のバックアップ有りと無しじゃその強さは比較にならなくなる。

煮炊きする火。安全な水も魔法で出せる。魔法で作られる様々な便利な魔道具も作れる……

何より大きいのは魔物、怪物避けの結界を冷孔の魔力で展開できることだ。

冷孔の開いていない土地でも魔法は使えるが生命力精神力を直に削ることになる」

「あー。なるほどなあ……食べ物と技術と防衛が……大事だよな」  
子供でも知ってることなんだがなあ、とヴァイスが肩をすくめ付け加えたのがちよつと辛い  
ほんとに、迷い込んできただけの一般ピープル、健康優良日本男児なんだよおれは。

「他にも魔物をどけなきゃならない理由はな  
悪神、邪神の使いとされている魔物や怪物は基本的に人を殺し、喰う」

「うわぁ……」  
「冷孔に居座る大物は魔力を吸って生きるからその場から殆ど動かないが……」

「その大物の怪物に魔力を食われてその冷孔は使い物にならない、と」

「その通り。冷孔に居座ってる大物は地上をうろつく怪物や魔物とは比較にならないくらい強い。

保有している魔力の桁が違うからな、肉体も強化されてるし中には強力な魔法を使う知能の高い奴もいる」

「なるほど、じゃ、大冷孔ってのはその凄い奴か」

「ああ、現在見つかつてる大冷孔は全部で十、その内解放済みは三つ……」

現在、世界最大の三つの都、帝都、王都、神都になっている」

「なんか凄いな」

「一個でも解放すれば最大級の名声と富が得られるだろうな。歴史上、英雄と勇者と初代教皇以外、大冷孔の解放には成功していない……」

さつき、一般的な神話に対しては話したろ？」

「善き神様が、とかつてやつだろ？」

「冷孔の解放は民を富ませ怪物の脅威から人を護るだけではなく神意にも沿うと

一般的には考えられている。冷孔を解放すればするほど

悪しき神の力は弱まり善き神が強くなる……」

つまりは宗教上の権威も非常に大きいんだ」

「なんか色々ともめそうだなあ」

「そう、もめる。具体的には冷孔を開放する命知らずは常に歓迎されるが開いた後の利権がなあ……」

「まためんどくさい話だなあ……細かいことはあんまり考えたくないぜ。」

とりあえず冷孔を開放すれば皆にとって良いんだろ？」

「民は富むな。それがきちつと分配されるかどうかは別問題だが」

「だったらそれでいいんじゃないの？」

「……それにな、もし雪平が本当に帰りたい

いや、生身のままガイアに行きたいのなら……」

大冷孔を開くことでしか可能性はないと思う」

「どういうことだ!？」

「大冷孔の魔力を利用してガイアまでの空間を繋げる魔法を使うんだ。」

冷孔の魔力を利用して長距離転移をする術式は存在するが

ガイアまでとなるとまるで未知の領域、雲を掴むような話だ」

「未知だろうが何だろうが可能性があるならとにかくやるっきゃね

ーよなあ……」

「そういう結論になるのか？」

「はい？」

なにいつてんだ。その結論しかないだろ。

「俺が送ってやるから危険を冒さず街で暮らすという手もある」

「やだよ。チャレンジしないうちに諦めて安易な道に走るのなんて俺の世界そんな奴らばかりだぜ。そんなの俺はもうごめんだ。」

危険は嫌だけどさ、どうせ命は軽いんだ。

「やっても居ないのに逃げるのは死ぬより嫌だ」

拳を握り締め自分に言い聞かせるように俺は吠えた。

「夢はでかくハートは熱く！能力や見た目や持つてる金が価値の全てじゃねーだろ！」

男の生きる道に本当に必要で頼れるのは

己の燃え滾る鋼の魂！元の世界じゃ理解も賛同もされないし

古臭く錆びちまったが……俺はこういう生き様が好きなんだよ！」

俺は俺の生き方が元の世界じゃ時代遅れなんじゃないかなーとは  
うすうす気が付いてた。

でも時代遅れだろうが俺は好きなものは好きという。

それが本当の個性ってやつなんじゃねえの？

「……くっ、くくくっ、はーっはっはっはっ！こいつは良い」

！！痛快で傑作だ！！

俺みたいな大馬鹿が他にも居たとはな！！」

「俺にはヴァイスが馬鹿には見えないぜ。少なくとも俺より賢そう  
だ」

「いやいや雪平、俺の目的である七つの大冷孔の解放なんて世間的な価値観に照らし合わせれば

十分大馬鹿の戯言、鼻で笑われる子供の夢想のようなものなんだよ。一つで英雄や勇者に成れる大事なんだ。七つ全部は……」

「こまけえことはいいんだよ！世間がなんと言おうがやるつもりなんだろ？」

「やって故郷に帰るんだろ？」

「無論だ」

「じゃあそれでいいじゃねーか」

「……片や、七つの大冷孔を開放すると決めた大馬鹿と片やガイアを目指すと誓った大馬鹿か……子供の空想だが悪くない。悪くないぞ」

「じゃあ、まずは雪平には怪物と魔物を狩り冷孔を開放する【バスタ】になってもらわなきゃな！」



## 第一話・郷愁、そして示された目的（後書き）

主人公、熱血馬鹿。

そして世界観の説明を少しさせていただきました。

## 第二話・最初の街

夜明け近く、まだ眠い眼を擦りながら

ガッチガチに石の様に固く、黒ずんだパンと

塩気のきつ過ぎる干し肉の朝食を俺は齧った。

分けてもらって悪いとは思いつつ俺は切り出した。

「なあ、飯って何時もこんな感じなのか？」

ヴァイスは少し顔を顰めながらこう答えた。

「……俺は料理は出来んのだ。」

自分でやってみたことも有るが古びた匂う革靴みたいになつた  
明けても暮れても戦いばかりやってたからな……

それに旅の間の保存食は何処へ行つてもこんな感じだ

それでも食えるだけマシといった所だな。

食料自体がこの世界じゃ貴重なんだ」

ヴァイスさんは出来そうなイメージがあつたけどなあ。

冷静沈着で銀髪紫眼の二枚目イケメン剣士つてだけの先入観で

判断するのはやっぱりよくないな。

ううむ、それにしたってこれは酷い。

やっぱり日本とファンタジー世界じゃ違うんだな……

国によって大分食文化や料理の腕前は違つて聞いたことあるけど。

日本の食事って美味かつたんだな。

よし、決めた。

現状に不満を言うのは誰だつて出来る。

安易な道に流されるのは嫌だ。

自分から建設的な事を始めなければ何一つ変わらない。

「なるほどなあ……一回でいいから今度作るときは俺に任せて貰っ

てもいいですか？」

「心得があるのか？」

ヴァイスが少しだけ嬉しそうな顔と声色をした。

本当に微かな変化だが。

分かりにくい人だが、信賴には値すると思う。

「多少なら」

「……今、お前を拾って初めて良かったと思ったぞ」

やっぱり、ちよつとは厄介者と思われてたんだなあ。

何時までもこの立場に甘んじているわけには行かない。

速い所、なんとかしないとイケないな。

食事の後、朝日に照らされながら俺たちは出発した。

道中、絶えずヴァイスが周囲に怪しい影が無いか気を配っている事が良く分かった。

怪物や追いはぎに不意打ちされるのは俺だつてごめんだ。

こついうところはヴァイスは旅慣れているらしく本当に頼りになる。

「タジンの町が見えてきたぞ」

いくつか丘を越えたところで街が見えてきた。

高さは大体三メートルくらいのレンガの壁に囲まれている。

「行くぞ」

「うーす」

門のところでは草木染と思しき赤や緑のチュニツクのような

衣服を纏った商人らしき人が馬車を門の中に入れている所だった。

周囲には皮鎧や金属製の鎧を纏った護衛や傭兵らしき人たちの姿も見える。

順番を待つて門の前にたどり着くと門番らしき人に呼び止められる。

「そこで止まれ。身分を証明するようなものは持っているか？」

ヴァイスは黙って荷物から銀色のプレートらしきものを差し出す。

「バスターか……何時もご苦労さんだな」

門番らしきおっさんは俺のほうをジロジロ見ている。

「見慣れない格好だな……」

「そっちは俺の連れだ。バスター見習いをやらせようと思っている」

「ふむ……」

いぶかしげな目線を送る門番のおっさんにヴァイスが何かを握らせ  
た。

「いつも大変だな。これで酒でも飲んで体を温めるといい」  
途端に門番の顔が疑惑から喜びに塗り換わる。

「おう、こいつはすまねえな。へへ……話の分かる奴は嫌いじゃな  
いぜ

おい、もう行つていいぞ。そっちの餓鬼も死なないうつ頑張ること  
だな」

門番のおっさんは掌に握った銀貨に集中して俺たちをもう見ていな  
い。

やっと俺たちは町の中に入れた。

「マジ助かったよヴァイス……俺はこっちの身分なんか有りはしな  
いからなあー」

「忘れていいぞ。金で解決できる面倒もあるということだ。

……その服は目立つし余り戦いには向いていないな」

「変に注目を浴びるのもやだしな

また頼りっぱなしだな……ほんと悪い……」

ヴァイスに申し訳ないし

なにも何も出来ない自分がちよつとみじめだった。

「忘れていい。初期投資は仕方が無い。

お前にとって幸いなことに俺は賭けもやらんし

女を買ったり酒や煙草もやらんから蓄えは少々有る」

ほんと禁欲的というかストイックな人だな……

「マジでありがとうございますアニキ……」

自然とそんな言葉が口をついて出た。

なんだろう、なんだかそんな感じがするんだ。

自分に兄弟や兄が居たらこう呼んでいたと思う。

「アニキ、か……」

ヴァイスはなにやら考え込んでいたようだったが  
直ぐに軽く頭をふつて俺にこう告げた。

「まあいい、宿を取ったら服と鎧、それに武器も見繕わなくてはならん。」

他にもやること覚えることはいくらでもある、ぐずぐずするな」

「はいっ！」

ぐだぐだ考えるのは後でも出来る。

いまはやるべき事をやるだけだ。

## 第二話・最初の街（後書き）

バスターになる為に最初の一步を踏み出した主人公。  
いまだにヒロイン未登場。女っ気が無いなあ。  
本格的に魔法を習得するのは何時になることやら……

### 第三話・敗北、打ち砕かれた偽りの自信と再起

「どういうことだよ！ふざけんな！幾らあんたでも言っていることと悪いことがあるぞ！」

俺はヴァイスに食って掛かっていた。

武器を選ぶ前に、武術の経験の有無を聞かれて剣道を今をやっている事を言っただが

街の空き地で木の枝を使って実際に一通りの型を見せた所で言われたヴァイスの一言が余りにも許せなかった。

「……貴族の遊びの剣だな」

奴は冷たくそっけなく興味なさげにそう言いやがったのだ。流石にこれはカチンと来る。

俺は遊びで剣道をやっていたわけじゃない。

自慢じゃないが同年代の学校の剣道部の中では敵は居なかった。先輩のキツイしごきにも耐え自主練習も欠かさずにやってきたというのに……

それを遊び？日本の剣術や剣道への侮辱。

それは俺のやってきた努力への侮辱だ。

「……面倒だ。俺に一撃当てられたら今の事は取り消してやる」  
ヴァイスが剣の鞘を手に持ちかえてなそう言った。

「ああいいぜ！あんたかどんだけ強いかしらねえけど吠え面かくなよ！」

「……掛かってこないのか？」

ヴァイスの声はあくまで冷淡だった。

「上等だ行くぞこの野郎！」

自らを奮い立たせるように  
思いっきり突きを繰り出して……  
しまった、と少し思った

突き技は本来は強力な殺人技。

竹刀でも突きの入り方や角度しだいでは防具を通りこして生身の喉や首に掠めることがある。

危険度が高いため中学までは禁止されている。

（あれだけ大口を叩いたんだ、なんとか出来なくても文句は……）  
あつけないほどにあつさりと

ガツ、と軽く先端を往なされた手ごたえが手に握る木の枝から伝わった。

やべっ、強い。

さっきの一撃に微妙に迷いが入ったのが自分でも分かった。

ヴァイスの目には全く同様が見られない

とはいえ余裕で受け流せる時点でかなりの

そこまで一瞬で考え、即座にヴァイスの打ち込みが来た。

速っ、受ける俺　間に合え……っ！

「おっ、ごっ……」

脇腹から全身に駆け抜ける激痛。

受けたはずなのにガードごと叩き込まれた。

こんなに重い剣今まで受けたことがねえ……

「分かったか？お前の剣が遊びだということが

実戦だつたら今ので死んでいる……

雪平、お前の剣は軽いんだよ」

「軽い……俺の剣が……軽い……？」

「打ちのめされても握った獲物を手放さない根性だけは立派だが  
余りにも未熟すぎる」

シヨックで目の前がゆがむ。

当たり前だ。打ち合いで剣を　いま握ってるのは木の棒だが  
竹刀を取り落とすものならどんなキツイ事を言われるか分かった  
もんじゃない。

少なくとも俺のもといった道場じゃそうだった。

「余りにもお粗末だったぞ。対峙した時点で俺の力量はうすうす分  
かったんじゃないか？」



躊躇ったお前が未熟なんだ」

ヴァイスの言うことはいちいちもつともだ。

なんとなくだが、対峙した時点で相手の気迫、身のこなしで相手の強さを察せられない奴は強くない。

それで油断した俺の未熟と迂闊さが恨めしい。

「察するに剣術それ自体の完成度は低くない  
剣術自体への発言だけは訂正してやる

剣さばきと足の運びを見ていたが……

最小の動きで人を殺すのに洗練された剣だが使い手がこれではな……」

そうだ、その通りだ。

日本の剣術や剣道自体がダメなわけが無い  
ダメなのは、俺だった。

「俺……そんなにダメだったのかよ」

「未熟だったな…… お前の為にはつきり言うておくが……  
バスターとして生き残りたいなら今までの剣術の常識は捨てた方が  
お前のためだ」

「……どういうことですか？」

「お前のやって来た剣は人間相手の剣で怪物相手の物ではないからだ  
お前の軽い剣では怪物の分厚い肉皮、或いは甲羅や鱗に歯が立たん」  
確かに……

日本の剣道はあくまで「人」相手のものだ。

そんなことを想定していない。

「それにな、お前剣で生き物を殺したことが無いだろう。  
生きるか死ぬかの気迫がまるで無い。

お前のは壁の中で貴族が剣というそれにそっくりだ。

安全圏の練習で幾ら強くてもそれは貴族の遊びに過ぎない」

悔しいけどこれも全くその通りだと思う。

死自体が今の日本では遠い。

昔の人はこれが練習や稽古がずっと続けばいいのに、と思っていた

という

話を昔道場の先生から聞いたことがある。

昔で練習や稽古でキツイ疲れたと手を抜けば本番で死ぬのに決まっている。

鍛錬不足〃死の時代ではないから

今思い返してみれば同年代の友達は

練習キツイとか防具が匂うとかヘタレたことを言う。

考えても見れば俺はガチで命の掛かった世界など知らなかった……

「悔しい……」

心が軋みを上げる。

しんどいのに痛いのに臭いのにも熱いのに寒いのに耐えて練習してきたのに……

負けたのも、自分が未熟なのにも。

負けて悔しくない？そんな奴が居たら俺は蹴っ飛ばしてやりたくない。

負けたのに悔しくない、そんなのは何一つ一生懸命頑張ったり真剣にやったこと無いやつだけが吐くセリフだ。

男が吐いていいセリフじゃねえ。

「人と比べて得た自信など偽りだ。

お前を待つ戦いはこんなものではないぞ。

怪物は情けも容赦も持たず殺しに来る。

覚悟と鍛錬をもってしても容易く人は死ぬのだ。

ならばどうする？

此処で止めるか？今ならまだ戦いの道に踏み込まず暮らしていけるぞ？」

人と比べて得た自信がいかにも偽りかは今、俺は知らされた。

怪物は容赦なく殺しにくるのも本当なのだろう。

「冗談じゃねえ!!」

歯を食いしばり俺は心の底から叫んでいた。

「生きてりゃ負けることもそりゃあるだろうさ!!」

頑張ったって負けることもあるだろうさ、だがな！！

ここで逃げたら、生きることには妥協したら俺は二重に惨めじゃねーか！！

負けたまま逃げるのだけは嫌だ！！」

本当に思い描いたことを捨てて、自分に負けたことを抱えて生きるのはきつと恐ろしく惨めなのだろう。

誇りを捨てても生きていける？

現実を思い知るのが大事？そんなのクソくらえ、だ。

必ず死ぬのなら、絶対に嫌だという事は魂の芯。

それを折られたまま生きれるほど俺は器用でも賢くも無い！！

「……それだけ吠えられるのなら、お前はきつといいバスターになれる。」

時間を食ったな。だがお前の慢心を打ち砕けたから結果的には良かったのだろう」

「ヴァイスのアニキっ！」

いぶかしげにヴァイスがこちらを見た。

「ありがとうございます！！」

俺は心の底から頭を下げて、こう言っていた。

この慢心を抱えたまま戦っていたら俺はきつと最初の戦いで死んでいた。

自分の都合の良い事を言ってくれたりやってくれたりするのが本当に良い人だとは限らない。

こういうとき、形式的でポーズではない

何故対戦相手に礼をするかの意味を本当の意味で体得した気がする。

「……ついて来い雪平、お前に似合いの武器を選んでやる」

ヴァイスは僅かに温かみのある苦笑を浮かべながら、そう言った。

何だかんだあるけど、やっぱりアニキはいい人だと思う。

「よろしくおねがいしますっ！！」

#### 第四話・似合いの武器

俺はヴァイスに連れられて町の武器屋に入った。

「本当は各種武器の専門店でオーダーメイドしてもらうのが一番いいが……」

「買って貰えるだけで十分にありがたいよ」

店内に入ると様々な武器が置いてある。

そのどれもが一般的にイメージする武器より大きく、重そうだ。持ち上げられるか疑問に思うほど大きなハンマーや両手剣。

長物は長い柄の先端に斧の付いたポールアックスや大薙刀に似た武器。

少しでも俺の今までやって来たことに近いのを探そうと見つけた常識的なサイズの剣もなんだか違う。

まるで剣というよりは非常に頑丈そうなごついひし形の針や杭……ヴァイスの使っている武器にちよつと似ている。

「人相手ならここまでのごつさも頑丈さも重さもいらねえな……切れ味なんか二の次三の次……」

折れないこと曲がらないことを大事にして体重と加重を利用して相手に突き入れる武器だわこりゃ」

本当に人相手を想定していないことがはつきり伺える。

「お前はそれは止めておいた方がいい」

ヴァイスに言われちよつと傷つく。

「……お前が使うべきなのはこいつだな」

そうヴァイスが指を刺したのは馬鹿げたサイズの片刃の大剣だった。先ず最初に頭をよぎったフレーズは斬馬刀。

本当にアニメかゲームに出てくるような武器だ。

剣の幅も厚みも尋常じゃない。

長さは一メートル強くらいか？

剣の横幅は思い切り広げた親指と人差し指の幅くらい。

厚みは一センチ近い金属の塊……

「……こんな振り回したら直ぐ筋も手首も何もかも逝きそうだな」  
脱臼や筋の断裂の故障の恐怖が頭をよぎる。

スポーツをやっている人なら理解できると思うが

体に付いた怪我の故障は癖になる。

ヴァイスが呆れたように呟く。

「……何の為に教会や治癒の魔法が有ると思ってるんだ」

「はい？」

多分俺は間抜けな顔をしていたんだと思う。

「ちょ、ちょちょちよつとまで、直るのかよ!？」

体の奥に付いた傷や筋の断裂つて後引くし基本的にはなおらねえんだぞ!？」

「何処の常識かは知らないがそれは捨てた方がいいな。

病とか手足を怪物に喰われたり腐ってしまった場合ならともかく

治癒の魔法や霊薬を使えば怪我なら繋がっている限り大体直る。

前より強靱になるくらいだ」

「直んの? 完全に?」

「怪物との戦いで千切れた手足を繋げてる所くらいみたこともある。  
復調しなかったという話は聞かない。

戦いで死んだという話なら飽きるほど聞くが」

流石はファンタジーだぜ……

元の世界に帰ったらスポーツ医学とか医者関連がひっくり返るな……  
でも故障を気にせず訓練やトレーニングが出来るなんて……

格闘家やスポーツ選手の夢が此処に有るなあ。

「そんなことより、その剣を持ってみる」

「……こうか?」

腰に力を入れて剣を持ち上げようと踏ん張る。

何とか持ち上げることがギリギリできた。

ぐっ……想像していた以上に遥かに重てえ……

一度筋トレのときにバーベルの重りを抜いた鉄の棒を持ったときよ

りも重い……

重量何キロあるんだよこれ……

確か竹刀の重さの最低は480グラムでそれ以下だと

試合の時の計量で弾かれたから……

しかしその竹刀でも長いこと振ってると重たく感じるんだぞ……

手がプルプルする、手首がイカレそうだ……

「ふむ……」

「はあ……はあ……剣ってさ……」

同じ重さでも握りのフィット感や剣先か鍔元かどっちに重芯があるかで

大分重さの感じ方が変わるよな」

「ああ、それはあるな……自分の手に馴染むかどうかは重要だ。

だがそれは自分の剣をオーダーメイドして貰う時の楽しみに取っておけ。

先ずはその剣に慣れる事から始めないとな」

「振り回されてるようじゃお話にならないもんな……」

「そうだ、振り回されるんじゃない、振り回すんだ。先ずはそこからだな。

だがその剣はお前に似合いだ」

言われて見ればなんとなくこのクソ重たい剣は他人の気がしない。

「とにかく豪快かつ大胆に、細かいことを考えず力の限り振り回し、その重さで叩き斬れ。

細かなテクニクや立ち回りは追々覚えていけば良い。

その剣ならば分厚い筋肉や硬い鱗や皮、甲羅を持つ怪物も当たれば只では済まん。

自在に使えるようになったとき初めてその重みが頼れる相棒となる」

「やってやるさ、一日も早くな」

「分かっているとは思うが十分扱いには気をつけろよ。

まかり間違つて落としたり人に当たったりしたら大事になる。担いで持つて歩くだけで十分修行になる」

確かにその通りだ。間違いなく体力が付くだろう。

気を張ってなきゃ……

「肩に担ぐで背負う為のベルトも要るな。」

次はそれに合わせた鎧もいる。

こっちは時間を掛けて選ぶぞ。命に直結することだからな」

次は防具屋か……バスターへの道は遠そうだが弱音は言ってられねえな。

## 第五話・防具選び、最初は魔法禁止令

俺とヴァイスは武器屋での支払いを終えて防具を選ぶ店に向かっていた。

武器の支払いの時にヴァイスがバスターカードを見せていたのが気になったので質問してみた。

「そういえば武器屋の支払いのときにバスターのカードを見せていたのってなんだ？」

「ああ、あれか。バスターカードは商店や宿で提示すると割引が利くんだ」

「へー。便利だな」

「命がけで怪物と戦うバスターへの支援策の一つなんだ。」

ただしバスターの資格だけ取って割引サービスだけ受けようなんて馬鹿が出ることを防ぐため

魔物の討伐記録か冷孔の解放記録のどちらかが無いまま二ヶ月を過ぎると失効する

ヒーラーだけ職業の特性上少し毛色がちがうが……」

なるほど、色々考えてあるんだなあ。

しかし割引をしても結構な量の金貨を俺の武器の為にヴァイスは支払ってくれた。

これから稼ぐにしても気合入れてかねえとなあ……

「さて着いたぞ、次は防具だ」

俺たちは防具を扱う店に入店した。

金属や鉄の金気のある匂い

それに皮や布、その他得体の知れない獣っぽい匂いもする。

日本の靴屋や服屋にも一種独特な匂いは有るがここまでダイレクトではない。

金属製の鎧や盾、皮製の鎧などは俺でも何とか分かるが明らかに謎の生物由来の素材で出来た防具なども置いてある。



「これ、怪物の一部で作った防具か？」

海老や蟹のような甲殻類の殻のような物を材料に作られた鎧を指差してヴァイスに尋ねる。

胴鎧に使えるだけのこれだけのサイズの甲殻を持つ蟹を想像してちよつと俺はゾツとした。

「そうだな、だが今の所お前には縁が無い。

只でさえ重い大剣を振り回しながら重装鎧を身につけて戦えないだろう？」

それもそうだ。

「お前が選ぶべきなのはこっちだ」

ヴァイスが指差したのは皮鎧のコーナーだった。

「軽鎧を身につける前に鎧下を選ばなきゃな……」

当然俺は鎧の選び方や良し悪しなど分からないのでヴァイスに任せることになる。

それから俺たちは随分と時間を掛けて鎧を選んだ。

「鎧下の類……クローサーーマーやギャンベゾンも

身につけずに鎧を直接着込むと擦り傷だらけになるぞ」

「町の中の傭兵とかバスターらしき人にはあんまり気にしてなさそうな人も居たけど？」

町の中のそれっぽい人の中には、明らかに肌を露出した人も居た。

「中には機動性と動きやすさを重視して鎧着込まない奴も居るがな……」

怪物の種類によつてはキツイ一撃を貰ったらそこで終わりつて奴もいるからいつそ鎧を着ないというスタイルもあるにはある

だが素人の内から格好やルックスに気を使ってどうするんだよ。死ぬぞ？

そういうことは一人前になってから言うんだな」

もつともな意見だ。確かに半人前以下の段階で見た目を気にしている場合ではない。

「まあ、お前のスタイルだと大剣使いだからほぼ軽鎧一択だな……」

ヴァイスの意見を参考にしつつ俺は鎧や装備の試着を繰り返した。  
「フィット感や動きやすさが生死の境を分けるから気に入るまで慎重に選べ」

幾つもの籠手や肩パッドや膝パット、ギャンベゾンやクロースアーマー

何着もある皮鎧をひたすら着ては動きを確かめ、脱ぐ作業。

「そつえば魔力、とか魔法の掛かった鎧とかもあるのかな？」

気になったのでヴァイスに聞いてみることにした

「当たり前だろ？防護や軽量の術式が刻まれた服や鎧などの防具は当然存在する。」

だがお前の先ずやるべき事は軽鎧をつけた状態での動きに慣れてからだ。

最初から魔法頼りにして基本の動きを疎かにして良い訳が無いだろ」

「気になったから聞いて見たんだ。はなから頼る気なんかねえよ」

「そのあたりはバスターに慣れてから防具に不足を感じるなら自分で金を貯めて買っただな」

「そつするよ」

再び防具の感触を確かめる作業に戻る。

しかし、防具を着け外しする作業というのは思っていた以上に時間が掛かるもんだな。

何時間掛かっただろうか？

ようやく、一通りの防具を選び出す作業が終わった。

「まだぎこちなく着慣れない感じはするが中々様になってるじゃないか」

「そつかな……？」

俺が今現在身につけているのは

体にフィットする黒く染められた皮製の全身ツナギ。

日本であったライダースーツに良く似ていてデザインもそれほど悪くないように思える。

そつえばライダースーツはもしものとき擦過傷を防ぐため実用性

があることを思い出した。

その上から金属製の肩パット、肘パット、膝パット。

思っていた以上に動きを阻害しない。

籠手は皮と金属を合わせた物で手の甲の部分には金属板が張られている。

空手やスポーツで使うファウルカップに似た局部を覆う物も身につけている。

重要なことはわかるがちよつとそのままでは気になるところだったが胴体部分を保護する黒の皮鎧がそれを目立たなくしてくれる。

鋳を打ち込まれて強化されており、色も黒く染められているので皮鎧なのに

そこまでデザインは悪くないように思える。

靴自体は日本で買ったスニーカーのままでヴァイスに問題ないといわれたのでこのままだ。

これだけでもなんだか十分強くなったような気分にしてくれる。

「そこまでさせておいてなんだが、防具自体は決して過信するな。

あくまで怪物との戦闘で受ける擦り傷程度の軽い攻撃のみ防いでくれるだけだ。

避けるのに徹しろ。そして大剣を使った防御技術も覚えてもらおう。

怪物のいい攻撃を貰ったら死ぬと思え」

今まで選んでいた時間を全否定するようなヴァイスのあんまりな発言に思わず突っ込んでしまう。

「それってつける意味あるのか？」

ヴァイスは出来の悪い生徒を見る教師のような眼で俺を見た。

「……お前もままごと程度とはいえ剣を振っていたなら心当たりはないか？」

小さな擦り傷や傷の痛みで集中を乱された経験は？」

うっ、心当たりがある。滅茶苦茶強い一撃を貰うと胴や籠手越しにも痛いんだよな。

今まで精神力で何とかしてきたつもりだったが……

「何の為に俺が鎧を着込んでると思ってるんだ。

怪物との戦いで万全を期さなくて良い訳が無いだろう。

痛みを堪えるには集中力と精神力が居る。

まだ奴らと殺り合ってたことが無いからわからんだろうが

僅かなこととはいえ無駄に精神力を失うのが怪物との戦いでどれだけ痛手になるか全然分かっていない。

防具をきちんとつければそんな些細な些細なことでも避けられる可能性が生まれる。

死に易い素人ならなおさら必要に決まってるだろう。

戦闘の些細な事を疎かにする奴は何れ負けるし、怪物との戦いで負けは基本的に死だ」

「……生意気言ってすいませんでした」

確かに、小さなことの積み重ねは大事だと俺も思う。

「分かれば良い。まあバスターの実情を知らないから仕方ない面もあるかな……」

おいおい覚えていけばいいさ」

「はい……」

「ああ、あと何故俺が極力魔法抜きでお前を鍛えようとしているか分かるか？」

ヴァイスにそんなことを聞かれた。

ヴァイスに言われた事今まで聞いてきた事を総動員して考えてみる。そういえば冷孔の無い所では魔法を使うとき精神力と生命力を直に使うと言っていたな……

「魔法に頼るようになると油断が出来て不味いから？」

ヴァイスは少し頷くようにして続けた。

「それも勿論ある。だがそれだけでは正確じゃない。

正確には前衛のバスターとして大成できなくなるからだ。

確かに魔法は便利だ。軽量化や強化が施された武器防具や補助魔法、攻撃魔法。」

前衛でも魔法が使えるのに越したことは無くその恩恵は計り知れな

い。

だが……解放されていない冷孔の主と相対するときの勝手は随分違う」

「なるほど……」

「閉ざされた冷孔の主と戦うとき

魔法を使うには生命力精神力を嫌でも消耗することになる。

俺たち前衛で武器を取って戦う奴らは

魔法のあるなしに戦わねばなんのだ。

雪平、お前は使えるものを何でも使うという道を最初に覚えさせた  
くは無い。

魔法で強化した武具防具を身に纏い

町の周りで既に開かれた冷孔の補助を受けて

比較的安全に地上をうろつく怪物だけを倒す……

そういう道もあるし大多数のバスターはそうする」

「それで自分が強いと勘違いすると不味いってこと？」

「その通りだ。それで冷孔の主に挑んで無残に壊滅したり命を落としたバスターを幾つも俺は見てきた。

魔法が使えなくなった時点で心が折れたり動揺を表に出すようでは  
前衛として話にならない」

なんか眼に浮かぶようだわ。

使えるものを使って何が悪い！って感じで。

魔法や武器や防具の強さを自分の強さだと勘違いするとか  
周辺の怪物にラクに勝てるから生半可に自信着いちゃって……

自分だけは例外、って思っただけ冷孔に特攻する様を……

そりゃまあ、使えるものを使うことは悪いことじゃないんだけどな  
んだろうこの違和感。

使えるものを使うことに対する危うさと言っかなんと言っか……

その危うさってどっかで見たこと有るぞ。

「……使えるものは使う、その事自体は構わないんだけど

慣れないというよりは自分のものにしていない事が不味いのか？

教習所出たてのペーパードライバーが走り屋紛いの爆走するようなもんか。

そら事故るよなあ。

となるとあれか。最初から魔法頼りつてのはオートマ車に乗って町の中回るみたいなもんでそれじゃレーサーや走り屋にはなれねえ。素の自分のテクニクを磨かねえと。

魔法に頼り切るってそんな感じなのかなあ」

「そのオートマ車とかペーパードライバーとか言うのは良く分からんが……」

ヴァイスが良く分からないといった表情をしている。

あ、やべえ。俺には分かるかも知れないけど

こっちは自動車とかねえんだ。

そっいえばこっちに來てから馬車は有っても自動車は見かけなかったなあ。

「ええと、車つてのは馬車とか乗り物とかそういう感じ」

この説明でいいのか？もつとちゃんと説明した方が良かったのか？

「なるほど。そういうことならわかる。」

どうやら大体俺の言わんとしているところを理解したようだな」

「便利なものを知るのはきちんと基礎を身につけた後からでいい、つてことだろ」

「そうだ。魔法の補助を受けないことは最初は辛いし勿論危険になるが……」

怪物の危険を肌で感じ取れるし最終的な地力が全く違うようになる。雪平、全てに慣れる。武器にも防具にもだ

これから一週間ほどで地上をうろついてる怪物との戦いで使い物になるように

お前を鍛えていく。一週間後には魔法抜きで怪物を実際に一体狩って貰うからな」

「わかった、やって見せるぜ」

俺は躊躇い無くそう答えることができた。

辛いしキツイ道だが、それでこそやりがいがあるというものだ。

## 第六話・修行、遙かに遠い故郷と風呂と音速剣

俺はヴァイスの指導の元、只管に修行と鍛錬に打ち込んだ。皮鎧に身を慣らし、明けても暮れても大剣を振る日々。

「……腕の力だけで上手く振れる訳が無いだろうが」

「これじゃダメか？」

「それじゃ直ぐに手首を傷める。」

もつと足の踏み込みから腰の捻り……

全身の力を使うんだ。

出来るまで今日はやってもらうからな」

中々に難しい。

竹刀とはまるで勝手が違う。

これだけの超重武器を扱ったことは無いからな……

修行の時間は実際以上に長く感じられた。

しかし密度の濃い充実した時間だった。

「まずは縦に振ろうとするな。」

担いでからの縦の切り下ろしはその性質上溜めが出来て

重さが乗せられるから威力も大きい分隙もできる。

まずは隙を最小限にすることから考える

縦の攻撃は自在に振り回せる臂力と技量がついてからでも遅くは無

い」

「はいっ！」

この横振りの攻撃というのが難しい。

全身の力をフルに使わなくちゃならないから

腕も足も酷い筋肉痛になった。

それでも止める訳にも投げ出すわけにもいかない。

やると決めたんだ。

こんな所で止めたなら何の為に始めたかも分からなくなる。

「剣を持ったままあの木まで可能な限り早く走れ。」



剣先を地面に引きずるなよ」

なるほど、この訓練がどういうのを想定しているのかは良く分かる。剣を持ったままどれだけ速く敵に詰め寄れるかは大事だ。

構えを作っては構えを解く訓練もやった。

これを可能な限り素早く行う。

これは防御姿勢の訓練だと理解できる。

……分かっていただけだよっぱり辛い。

肉体を酷使し苛め抜く過程、辛いものは辛い。

そういえば元の世界の体育会系の部活動全般の事を思い出す。

こういう地味で基礎訓練が嫌で辞めて投げ出してしまう奴らもとても多いことに。

でもやっぱりそういうのを受け入れて何処まで自分で頑張れるかによって

何処まで伸びるかは決まってくると思う。

何処まで育つかも分からない、才能は未知数で頑張っても成果など上がらないかもしれない。

そういうことに努力という水を与え続けることの出来る

環境や意志の強さを持ち続ける事が出来る方が珍しいのだと俺も思う。

何処かの誰かが言っていたがやはり学校は箱庭なのかもしれない。

俺たちは箱庭の中の小さな才能や優劣ばかりに眼が行って

努力することの意味を何処かに見失って忘れてしまいがちだ。

俺の今やっている鍛錬、努力、訓練、修行は

元居た世界でいう頑張りとは何かが違う、絶対に違う。

止めれば、緩めれば、死ぬ　そういう類。

弱い心に流されて少しでも手を抜けば今此処で死ななくても怪物と戦えば恐らく死ぬ。

情けも容赦も無い相手が本気で殺しに来ることが

そう遠くない未来に確定している……そういう類の剣の修行。

そう、現代では銃を使った戦い方が主だから

恐らくは戦国時代の武士やらがやったのに近いと思う。

今、俺は自らの生存を掛けて剣を振っている……

「ああ、これがただの訓練だったら――！」

俺は叫んでいた。

心の底から今こそそう思う。

ヴァイスは何も言わない。

ただ黙って俺が剣を振る所を見ている。

腕が完全にながらなくなった所でヴァイスがようやく口を開いた

「……少し体を休める」

その時は返事をする気力も無かった。

呼吸が落ち着き、筋肉が溶けそうな疲労を抱えながらも俺は考えていた。

恐れないためにはどうすればいい？

死なないためにはどうすればいい？

ただ只管に、そう浮かぶ迷いを

現実の手法と具体的な行動に切り替えていかなばならない。

生き残る為に。生き残って怪物を倒し、強くなって冷孔を開いて元の世界に帰る為に。

勝利しなければ俺には真の安らぎは訪れない。

かといって手を休めれば心折れたまま妥協と偽りの人生が待っている。

それだけは……それだけは嫌だ。

例え死ぬことになるうとも耐えられない。

思考が必要なことに戻す。

必要以上の恐れは邪魔だ。

恐れて縮こまり、筋肉が萎縮すれば剣は振れまい。

恐れる心を黙らせて、集中すべきは相手の動きと自らの動きの把握。

恐れるくらいなら叫びでかき消す。自らを誤魔化そうとも。

俺自身の継続戦闘能力はどうだ？

元の世界の記憶を必死に掘り出す。

計算が苦手な俺でも、元の世界での最速レベルでの剣速は覚えてい  
る。

確か構えから打突まで0.1秒。

……戦闘中の5分、試合中の5分って無茶苦茶体感時間長いんだよ  
なあ……

予備動作や駆け引きを無視すると

最低でも300秒戦い抜くには300回は振れるようにしておきた  
い、そんなことを昔考えたことを思い出す。

15分で大体900回……実際はそんなに数を振る事は恐らく無い  
が。

そういえばそれに合わせて漫画やアニメ、ゲームで出てくる

音速剣とか剣から衝撃波とか出すのってどれくらいの速さが必要か  
も考えたことがある。

音速は340メートルを1秒で進む。

一振りの速度が0.0025秒で400メートルを一秒。

三十四倍の速度で動ければ音速剣が可能。

ブン……ブン……とかもつさり、という擬音表現が余りにぴったりな

このクソ重い剣だと気の遠くなる遠さだ。

零一つの桁が余りに遠い遥かな領域。

遥かな領域だといって、目指していけない理由なんか無い。

……もしも魔法がこっちにあるなら、何時かやって見せる。

遥かに遠い世界の故郷も、遥かに遠い剣も、目指して何が悪い！！

そういうことを考える余裕が出来ると

ふと自らの体の臭いが少し気になった。

「そういえばこっちに来てから熱い風呂に入ってねえなあ……」

こっちのファンタジー異世界に来てから余りにも余裕が無さ過ぎた。  
宿では水場で体を流してゴワゴワした布で体を拭いていた。

元の世界で学校で練習が終わったあと学校のシャワー室を借りて  
そこのボイラーが調子悪くて冷たいシャワーを浴びた気分によく似  
てる。

我慢できないことは無いけどさ。

「ヴァイスさん、こっちの世界に熱い風呂ってないの？」

「前から思っていたがちょっと贅沢な奴だなお前は。」

熱い湯が張られた浴槽は設備が整ってる高級な宿屋とか

王侯貴族の贅沢品だぞ」

お前の装備とかで色々蓄えが心ともない、とヴァイスが付け加えた。

「あー、こっちではそうなるのか……まあ我慢できないことはねえけどよ……」

もう一個頑張る理由が出来たな……絶対に早い所風呂に入れるようになつてやる」

第六話・修行、遙かに遠い故郷と風呂と音速剣（後書き）

女っ気の無さはそのうちどげんせんといかなあ。

## 第七話・初陣

そして、一週間後の朝がやって来た。

「おい、起きろ雪平」

「おう……」

「今日は町の外に出るぞ」

これが初陣か……緊張するぜ……

これから命がけの戦いが始まるかと思うと……

軽鎧を身につけ、大剣を持って

ヴァイスに連れられ町の外に出る。

門番のおっさんに生きて帰って来いよといわれた。

不安をあおるような事を言わないでくれよ。

「この辺りの怪物の特徴は頭に入っているな？」

「スラだっけ？大丈夫だ」

命が掛かっているから必死にもなる。

「まずは単体でうろついている怪物を探す」

程なく草原を這う怪物の姿が眼に入った。

一メートルくらいのダンゴムシに似ている。

赤くて硬そうな殻には凶悪な短い棘が生えている。

ヴァイスに聞いたスラという怪物の特徴と一致している。

「まずは俺が手本を見せるから良く見ている」

声を落としてヴァイスは言い、剣を抜き放つと駆け出す。

速い……そして軽やかに跳躍すると

殻と殻の継ぎ目を縫うように

ヴァイスの持つ黒い杭のような長剣が体重を乗せて怪物を貫く。

鮮やかな奇襲だった。

スラと言わらしいダンゴムシの怪物は

ピン止めされた昆虫標本の用にもがいていたが

やがて動かなくなり、殻だけを残して怪物の血肉は湿った砂のよう

な物質にあつという間に変わった。

「奇襲で殺せるなら一番良い。怪物の動きに慣れるためにもお前には動いている奴も相手してもらおうが……」

本来は無駄にダラダラと戦いに付き合う必要も無いだろう」

ヴァイスは手馴れた手つきで元怪物の殻と砂を掻き分け

ピンポン玉のサイズの透明な丸い結晶を取り出した

「これが怪物の核だ」

「これが核なのか……」

これも事前に説明を受けたがこの結晶には魔力が封入されているらしい。

使い道は多岐に渡り

バスターの討伐記録にもなるからきつちりと集めるように言われた。

「一番最初はサポートしてやるから怪物を狩って見る」

「わかった」

「適当な獲物を見つけたら俺が雷で動きを止める。即座に斬れ」

また単独でうろついているスラを探し……見つけた。

以前の獣避けの結界を張るのは除き

ヴァイスが魔法らしい魔法を使う所は初めて見る気がする。

音も無く黒い長剣でスラを指し示すと……

「雷刃」

ヴァイスは散文的、端的にそれだけ呟いた。

長々とした詠唱も大げさなジェスチャーも何もない。

即座に効果は現れ、一筋の雷光がヴァイスの剣の先端から迸る。

雷に打たれたスラが黒煙と焼ける臭いを漂わせ這いずっていた動きを止める。

「やれ！」

魔法の効果に驚いている暇も無くヴァイスが合図した。

「うおおおおおおおおおっ!!」

俺は気合と共に駆け出し、怪物に肉薄する。

スラが大剣の範囲に入った瞬間

大地を踏み込み得た力を腰から腕に伝えそして大剣を振るう。

遠心力の乗った大剣が怪物の殻に激突し……

恐ろしく硬い手ごたえを返す。反動で弾き飛ばされないよう踏ん張りさらに遠くへ大剣を振り切る感じをイメージして……

「つつしゃあ！」

怪物が折れた棘と斬られた傷口から体液を巻き散らしながら僅かに吹っ飛んだ。

明らかに深々と切り裂かれており……やがて動かなくなる。

こいつも先ほどと同じく殻の一部と核だけを残して湿った砂になる。

「やった……」

思わず深い安堵のため息が漏れた。

「……良くやった」

「あざっす！しかしこいつら本当に硬い……」

「次は一人で動いているスラを相手にしてもらおう」

今よりよほど危険だぞ。窮地に陥らない限り助けないから覚悟を決めておけ」

次は動いているこいつらか……まだまだ気が抜けなさそうだ。



## 第八話・急襲

ヴァイスのサポート付だが俺は初めて怪物を斬った。

一メートルはあるダンゴムシのような怪物、スラの核を拾うと今度は動いている奴らを倒すことになった。

怪物の動きに慣れる為に。

「分かっているとは思うが刃の角度と位置が悪いと切れずに剣が轢かれるだけだぞ」

「心配すんなって」

あいつ等は縦回転してくるらしい。

当てる剣先の位置が回転するスラの中心より下だと叩き斬れないだろう。

再び町の外、魔物避けの結界の範囲を外れた草原をうろつく。

単独で地面を這いずるスラを見つけると、俺はこちらに注意を引くために小石を投げた。

「ほら、かかって来いよ！」

そう挑発すると怪物の反応は劇的だった。

丸まってこちらの方に突進してくるのだ。

坂も無いのにその勢いは強烈だ。

まるで自動車……しかも巨大なトラクターについてるごついタイヤだけが

こちらに外れて飛んでくるようだ。

しかもこのスラというダンゴムシに似た怪物の殻には凶悪な棘がついている。

その棘が地面を抉りながらこっちに来る。

あの速度の突進をまともに喰らえば大怪我をすることは間違いない。恐怖を感じないといえは嘘になる。

だが、あいつの動きは直線的でこっちの体に体当たりしようと狙いをつけている。

それさえ分かれば……

「ここだあつ!!」

俺はスラの軌道変更が不可能なタイミングで  
体を左に倒しながら踏み込んだ。

俺の持つ大剣が体の動きと踏み込みに合わせて振られ……

スラは俺の体がつい一秒前まで居た位置……

現在そこには遠心力を乗せて振られる俺の大剣の刃が待つ。

交差攻法、クロスカウンター気味に俺の大剣と回転するスラが衝突  
した。

大剣の柄から伝わる強烈過ぎる衝撃に手を離さないように握り締め  
やがて硬質の殻を打ち破り肉を裂く手ごたえに変わる。

刃が真芯でスラの殻を捉えた瞬間

スラの中身の詰まったタイヤのような構えは崩れ怪物の体がくの字  
にへし折れる。

へし折れただけでは相手の勢いも俺の大剣も止まらず、真つ二つに  
叩き斬った。

真つ二つに斬られた怪物がボスツ、ボスツ、と音を立てて地面に落  
下した音を俺は確かに聞いた。

「よっし！狙いはばっちりだぜ！」

「お見事」

ふう……

僅か一合、長い訓練に比べて余りに短い戦闘時間だ。

でも実際はこんなもんなんだろう。

だが特訓のかいあって初撃で決めることが出来てよかった……

ダラダラと長引かせて良い事なんかない。

殺るか、やられるかだ。

本当の真剣勝負なんて初めてだったからなあ。

やっぱりとつと疲れが来る。

倒したスラの残骸を見ると程近い所に核が転がっていた

怪物が落としたコアを拾い上げながら俺はヴァイスに尋ねた。

「なあ、ヴァイス、こいつらって本当に生き物なのか？」

「どうしてそんなことを聞く？」

「なんというかその……気になったんだよ

俺たちの世界じゃこんな死んで直ぐに

砂に帰っちゃうような生き物居ないし……でもやっぱり生き物なのか？」

「こいつ等は断じて血の通う生命などではない……！」

妙にきっぱりと大声でヴァイスは断言した。

しかも物凄い剣幕だ。

聞いているこつちが驚くくらいに。

なおもヴァイスは続けた。

「怪物と魔物の全ては邪神と魔人の作り出した狂った玩具だ。

人を喰い殺すだけに作り出された哀しくも唾棄すべきモノだ。

絶対に止めさせねばならん。止めねばならぬ。

こんな不毛なことはな」

額に眉根を寄せてヴァイスがそういうのを俺は黙って聞くしかなかった。

「……こつちに来て見ろ、雪平」

ヴァイスの手招く方向へ近寄ってみるとある物があつた。

「うげ……」

ヴァイスに言われるがまま近寄るとそこにあつたのは野ざらしの死体だ。

既に完全に白骨化しており割れた頭蓋骨や散乱した骨

それにこびり付いた赤茶けて変色した衣服の残骸らしき布……

錆びた剣が一振り転がっている。

「恐らくはバスターになろうとして怪物に殺された食い詰め者の末路だな」

「こりゃひでえや……」

ヴァイスがあんなに怒りを露にしたのもわかる気がする。

たとえ宗教がかった理由だとしてもこれを許せないというのは良く

分かる。

「怪物が居る限りこんな事は日常だ」

「なんとかしなきゃ、つてのは良く分かるぜ」

なんまいだ、と呟いて俺は手を合わせた。

「成仏してくれよ……埋めてやらないか？」

「雪平には悪いが怪物が徘徊するこの草原でそれをする時間は……それにこういうのはこの辺りには幾らでも転がって……」

「それでもこのままにしとくのは……」

食い下がろうとしたとき、異変は起きた。

「うわあああああ！！！」

悲鳴と怒号のような騒ぎ声がここまで聞こえてくる。

二百メートルくらい先の町に続く街道の方を見ると一台の馬車が疾走している。

その後ろを馬車と同じくらいのサイズの怪物が追いかけている！

鋭角的なフォルムと銀色の金属質の皮膚。

体格を支えるには細い四本の足。

何より目立つのはメスのような形をした巨大な一対の刃の触腕……

まるで金属で出来た巨大な力マキリに似た怪物……

良く見れば馬車の幌の一部は無残に切り裂かれている。

「馬車が襲われている……マリウスか……不味いな。」

魔法耐性が高くて地上を徘徊する奴の中では強いほうだ」

「助けに行かないと不味いだろそれ！！」

「……先にいく……何れやりあう相手だ、お前も来い。」

だが間違ってもお前は奴の正面には立とうとするなよ」

そういつてヴァイスは風のように走っていく。

「ちょっと待て！俺はこの剣あるしアニキみたいに身軽じゃねえんだぞ！！」

大剣の重みがかなり辛い俺は可能な限りの速度でヴァイスの跡を追った。

第八話・急襲（後書き）

ようやくそろそろ女の子が出せそうだ……

## 第九話・天使

「はっ……はっ……」

俺は大剣を背負って今まさに怪物に襲われんとする馬車に近づこうとしていた。

馬車を引く馬が苦痛にいなないたかと思うと地面にくずおれた。不味い。馬が足をやられた様だ。

このままでは馬車に乗っている人がやられ……

「疾き風よ、我が神の名の下に集いて敵を討つ槌となせ！風打！！」  
ヴァイスではない。凜とした女の子の声だ。

馬車から飛び出した女の子が怪物に向けて魔法を放ったのだ。

飛び出した、というのは比喻表現じゃなくて、文字通り飛んで出たのだ。

その女の子の背には一対の白い翼が生えていて。

そして、紋章のような刺繍が施されたゆったりと長いローブを風にはためかせながら

杖を持って空を飛んでいる。

「天使……？」

思わずそんな事を俺は呟いていた。

鋭角的な金属で出来たカマキリのような怪物マリウスは

仰け反る様に後退し、二、三回頭を振ったがそれ以上の損傷は受けていない。

「何でさっきから効いてないのー！！」

翼持つ少女は手にもつ杖を振り回して空中から苛立ったように声を上げていた。

「雷刃」

散文的で一切の誇張もない冷たい声がポツリと草原に響く。

一筋の雷光が怪物を包み込んだ。

「雷刃、雷刃、雷刃」

ヴァイスは二度、三度と繰り返して唱えていく。

その度に稲妻が空を割って閃いた。

ヴァイスの魔法が怪物の足を止めている間に俺は何とか合流することが出来た。

「ぜーっ……はーっ……」

荒い呼吸を抑えようと努力する俺にヴァイスが非常に早口で声をかけた。

「そのままでもいいから聞け雪平、マリウスには見ての通り魔法の効果が薄い。」

足止め程度の役にしか立たない」

良く見ればヴァイスの雷はマリウスと呼ばれた

デカイ金属製力マキリの化け物の表面を滑るように大部分が弾かれている。

弾かれた雷が空中に放電している。

「雪平、俺がマリウスの足を止めている間に後ろに回り込んで間接部を叩き折れ！！」

鳥人族の娘は奴の直上真上から風打！！」

「あ、あんた達」

女の子の疑問をヴァイスが遮る。

「後にしろ、今は話している時間はない！！行け！！」

「わかったぜ！！」

ヴァイスが雷の魔法を打ち込んでマリウスの動きを止める。

俺はその間に金属の力マキリの後ろに回りこんで……

「くたばれっ　！！」

気合一線、思い切り後足の間接部目掛けて剣を横殴りに殴りつけた。金属の擦れる耳障りな音と共に俺の大剣が化け物の後足を捕らえた。折るまでは行かなかったが怪物の後足の片方は

本来想定していない方向にへし曲がった。

「今だ！雪平は離れる！」

ヴァイスが鋭い声で上空を飛ぶ女の子に合図する。

「了解く！疾き風よ、我が神の名の下に集いて敵を討つ槌となせ！風打！！」

俺の頬を凄まじい風が髑つた。

眼に見える現象が無く、彼女のセリフから考えると

どうやら彼女の魔法は圧縮した空気の砲弾のようなものを叩きつけるものらしい。

怪物は後ろ足を破壊された所に上方から空気の砲弾を食らい姿勢を崩して倒れた。

「雪平！同時に仕掛ける、縦斬りで胴を折れ！！」

「おおおおおおおつ！！」

渾身の力を込めて怪物の胴を、それすら超えて地面さえ叩き斬るつもりで俺は大剣を担いで振り下ろした。

マリウスの胴体部の半分以上に大剣が食い込む

ヴァイスのほうは怪物の頭部らしき所に剣を突き入れており……

その自慢の鎌を振るうことなく怪物は一瞬ブルツと震えたかと思うと今までの怪物と同じように体組織の崩壊が始まり

湿った赤茶けた砂を間接部から撒き散らしながら金属の外骨格だけを残した。

正直な話、魔法が足止め程度にしかないこんな強そうな怪物を殆ど何もさせないうちに倒すヴァイスの力量と指示の的確さには驚くばかりだ。

「やっぱアニキすげえな……こんな金属の塊みたいなカマキリの化け物に

どうやって突きが入るんだよ……」

「おおー！！あんた達バスター？やるじゃん！！」

上空からかけられた声の主の女の子が地上に降りてきた。

そっいえば翼の生えた女の子は何なんだろう？

こっちの世界にはこういう種族とかが居るのか？

俺にはまだまだ分からない事だらけだ。



第九話・天使（後書き）

やっと女の子が出せた……

## 第十話・鳥人族の娘

「あゝしんどかった……」

全くとんでもない初陣になったと思う。

戦闘で慌しかった為じっくりこの少女を見ている暇などなかったから改めてこの翼の生えた少女を見てみた。

白い一對の翼が背中から生えている姿を見ると本当に天使にそっくりだ。

年の頃は俺と同年代くらいか？

白くて滑らかな肌、セミショートの金色の髪は外側に跳ね、パツチリした蒼い瞳。

かわいい、といって差し支えないように思える。

「なんだか慌しくてろくに自己紹介もできなかったわね。

あたしはミルク」

快活に笑いながらミルクと名乗った少女はそういった。

「ヴァイスだ」

「俺は桜田雪平」

「ヴァイスさんにサグラダ・ユキヒラね。

ユキヒラのほうは変わった響きの名前ね、人間族で黒髪にダークブラウンの眼ってあんまり見ないし」

ちよっとなまってるぞ、おい、でもまあいいか。

人間族って事はこの世界にはミルクの他にも人の派生みたいな種族が居るのかな。

「さっきは指示に従ってくれて感謝する」

ヴァイスがミルクに礼を言った。

「あー。いいいいいよ。初級魔法でも

詠唱を省略してあれだけガンガンぶっ放せる時点で

ヴァイスさん結構な実力者ってことだし……大丈夫？」

「この程度なら問題ない」

ヴァイスは事も無げに言った。

「続きは町に入ってからにするぞ。」

とりあえずあの馬車を何とかしないと。」

「あ！そうだ！！依頼者のおっちゃん大丈夫かな？」

ミルクが思い出したように言った。

「馬が足を痛めてたみたいだけど……」

もし馬が骨折とかしてたら俺らだけじゃ

馬車を何とかすることはきついんじゃないかと思つた。

「生きてればなんとかなるわよ。私回復魔法も使えるし」

ミルクがあっさりと言つた。

そういえばこの世界回復魔法もあるんだよなあ……

「雪平、マリウスの核を拾つておくのも忘れるなよ」

「あいよー」

三十分後、俺たちはタジンの町に帰り着いていた。

ミルクの回復魔法を見たが凄いいもんだな。

蹲つて苦しげに嘶いていた馬が暫く淡い光に包まれて居たと思うと直ぐに動けるようになったのだから。

馬車の所有者の商人のおっさんには随分感謝された。

おずおずと謝礼の話を持ち出す商人のおっさんに

依頼を受けていたわけでもないし勝手にやったことだから必要ないとヴァイスは断つた。

おっさんは随分感激していたように見えた。

戦つて腹も減つたしタジンの町の食堂で食事をする事になったのだが……

「助かつちやつたし食事代くらい奢らせてよ」

と、ミルクが言つたので彼女も着いて来る事になった。

食事はやたらに齒ごたえのあるフランスパンと

こつちで言う鳥と野菜を煮込んだクリームシチューに似ていた。

薄味だが腹が減つていたのでとても美味しく感じる。

「悪いな奢つてもらつちやつて」

「気にしないでいいよ。あの商人のおっちゃんから護衛代もらって  
懐暖かいし」

「もぐもぐ……そういえばさ、気になってたんだけど」

俺はシチューをかみ締めながらヴァイスに尋ねた。

「冷孔ってワープっつーかテレポートっつーか……」

転移ってのが出来るんだろ？何で怪物がうろつく危険な外の道を使  
って馬車を出すんだ？」

「あんたそんなことも知らないの？」

ミルクに思いつきり馬鹿にされたような顔をされる。

「雪平は大部分の記憶を失って森で倒れてたんだ

世間一般の常識を忘れていても仕方有るまい」

ヴァイスがフォローを入れてくれるのが本当にありがたい。

「いや、そうなんだよ……情けない話なんだが」

「あー、そうだったんだ……ごめんね」

「いいよ、知らないのは事実だし」

「雪平の為に説明するが冷孔の転移とは決して万能ではない。

幾つかの術的、社会的制約が付いている」

「ふんふん」

「雪平も知つての通り冷孔の魔力は多岐に渡って利用されている。

町に怪物を寄せ付けなかったための防護結界、土壌の活性化、

それに普段の生活の炊事や産業に使用される魔力……

転移というのは転送する質量に比例して魔力を消費するからその魔  
力消費は多大なものになる。

町と町の徒歩移動が危険だからといって安易に転移を繰り返せばど  
うなる？」

「あー。分かったぜ、町の結界とか他の部分に魔力を回せなくなる  
わな。

そりゃ確かに不味い」

「その通り、冷孔から湧く魔力は何れ回復するとはいえ  
貯蔵している部分を使い切ってしまうえば結界は維持できない。

それに冷孔の転移には世界を巡る地脈の流れの【順路】が存在しどこでも好きなところへ、とは行かない

冷孔の転移が可能なのは大体一週間に一度くらいの頻度だ」

各駅で乗り換えの必要な電車みたいなもんか。

しかも待ち時間が一週間の……

ヴァイスの説明でようやく得心が行った。

「そういう魔法関連の問題もあるんだけどさ」

ミルクは口を挟んだ。

「冷孔の転移って一部の人しか利用できない所があってねー

冷孔転移の使用料ってたっかいのよ。物凄く」

「さっき言った冷孔転移の社会的制約だな」

「冷孔転移を使って一年かけて世界中を巡る大キャラバンや大商人とか

一部の貴族や王族、割引が使える高ランクバスターならともかく一般のちっちゃな規模の中小の商人は危険を犯してでも街道を行くしかないのよ

だからバスターを護衛に雇うのが成り立つのよ」

世知辛い話だ。

「良く分かったぜ」

「勿論町の外には怪物も溢れてるし、しかも怪物と戦うより人の商人を襲ったほうが

楽で手っ取り早いって浅はかな考えを抱いた不心得者で不信心者でクソツタレの

ごろつきとかバスター崩れが野盗化して

怪物避けの結果を使って町の外で張ってる事もあるしね」

「ああ、そういう略奪者は斬っても罪にならんからな、覚えておけ」

「お、おう……」

「捕まえて町に連れ帰った所でどうせ奴らを待つのは縛り首だ」

「そういう野盗って奴ら何考えてるかしらね。

目の前に人の敵、神の敵の怪物が今も町の外をうろついているのに……

何で善き神はああいう奴らが生きるのを許しているのかしら」

ヴァイスは事も無げに、ミルクは怒りを露にしてそう言った。

やはり価値観の違い、死と危険の近い世界であることを実感する。怪物ならともかくやつぱり人を斬るといふのは抵抗がある。

日本の法律に照らし合わせたところでそういう奴らはやつぱり死刑だろうし

襲い掛かられたら反撃した殺害した所で正当防衛が成立するだろう。

「……なるようにしかならねえか」

その時は、その時だ。

此処は日本でもなければ甘ったれたぬるま湯の世界でもない。

殺さず、などという理想が実現出来ないだろうという事は分かっている。

そんな神業を行える實力は、俺には今の所無い。

改めて俺は密かに覚悟を固めた。

その状況が訪れたらやるべきことは相手をかわいそうとか

相手にも人生や友人があると思うことじゃない。

そんなのは皆誰だって一緒なのだ。

相手の殺意や恫喝に脅えて筋肉や体を縮こまらせることじゃない。

そういう状況で出来ることなど知れている。

体を動かし、正確に剣を振る。それだけ。

今の俺にはそれしか出来ない。

でもなあ、なるべくならそんなことは無いように願いたいぜ。

## 第十一話・異世界パラダイムの栄光の七柱神

シチューとパンを平らげかけたときミルクが口を開いた。

「そういえばさ、二人ってどの神を信仰してるの？」

「ええ？うーん……」

突然そんなことを聞かれても困る。

日本人は宗教観が薄いのだ。

クリスマスを祝ったり神社や寺に詣でたりもする。

確か家では仏壇があったから仏教？

浄土真宗だっけなんだっけ……

「宗派の名前が出てこねえ……」

「ええー！！……まさか邪神信仰ってわけじゃないよね」

ミルクに盛大に驚かれた後嫌な顔をされる。

「忘れたのかミルク。雪平は記憶喪失なんだ

宗派の名前が出てこない、という事は

以前何かを信仰していたけど忘れてしまったということだろう」

ヴァイスのフォローが本当にありがたい。

どうやらこの世界は非常に宗教の権威が強い世界らしい。

「あ、そういうことね……」

でも神の名まで忘れてしまうというのはほんとに酷いわね

邪神に呪いでも掛けられたんじゃないと思うわね

良く良く考えて見れば怪物を倒している

バスターが教義に反する背信者や邪教徒であるはずもないか……」

本当に俺が邪神に呼ばれてこの世界に来たとするなら

正直言って殴りたい。絶対に殴ってやる。

「バスターって言っても俺はまだ見習いだし」

「ちよつとまって……神の名前を忘れてるって

じゃあ雪平は神の加護も無しに怪物に挑んでたの？見習いで？」

ミルクが驚愕したように呟いた。

「そういうことになるな」

「怪物を倒さなきゃ見習いから脱出できないじゃん」  
ヴァイスと俺がこたえる。

「じゃあ何か人間族の魔法で体を強化してたとか……」

「いや、俺魔法自体がよくわからん」

「嘘でしょ……見習い加護なし魔法なし」

それで怪物、しかも地上をうろつく怪物の中でも結構強めなマリウスとの戦いに参加してたなんて……

自殺志願と変わらないというか無知って怖いっていうか……」

ミルクが頭を抱えていたが俺にはいまいちピンと来ない。

「まあ、こいつは色々と変わったバスター見習いだな。」

良ければ雪平に神の説明をしてやってくれないか？

ヒーラーは神官でもあるしな」

ヴァイスがそう頼むとミルクは心良く頷いた。

「了解、あんたの為に色々教えてあげるわ。」

この世界の栄光の七柱の善き神について」

「よろしく頼むよ。」

邪神が怪物を作り出して、邪神が善き神に封印されたって話はヴァイスから聞いたんだが

詳しい内訳は教えてもらえなかったから……」

「知ってたならもうちょつと詳しく教えてあげなさいよ」

ミルクがヴァイスをにらんだが相変わらずヴァイスのほうは涼しい顔。

「そのうちやろうとは思っていたが

剣の振り方や怪物を倒す具体的手段やら何やらを教え込むので忙しかったからな……それに一辺に詰め込んだ所で雪平には多分覚えられん」

「はあ……ヴァイスさん以外と酷い人ね」

「大本を外さなければ問題なかるう」

「いや問題あるから。細かい不信心はこの際寛容に見逃すわ……」コ



ホン」

いったん咳払いをしてからミルクが切り出した。

「善き神、栄光の七柱神は邪神とその軍勢から全ての種族を守護し戦う力を貸してくれるありがたい神様よ」

彼女の説明によると

人間族を守護する火と勇気の英雄神ファジーン

鬼人族を守護する雷と歓喜の鬼神サドヴァル

獣人族を守護する土と純粹の獣神アステルトリイ

鳥人族を守護する風と自由の鳥神フィアルヴェトレ

妖精族を守護する木と慈愛の精霊神リヤプラフィロト

竜人族を守護する水と知恵の竜神シェウオースタ

そして全ての神族を統べる光と正義の主神セイルミラシャ

この七柱の神が居るらしい。

「彼らが私達パラダイムに住む全ての種族を見守ってくれてるの」というかこの世界の名前を初めて聞いた気がするな。

パラダイム、か……

それにここタジンの町じゃ人間族……多種多様な眼や髪の色をした人を見たことは有っても

他の種族を見たのはミルクが初めてだった気がする。

まあ、背中に羽の生えた鳥人族つてのが居るのなら

他にも異種族が居てもおかしくはないとは思っていたけど。

「具体的には加護つてのはどういうものなんだ？」

俺はミルクに尋ねてみた。

「神様たちに信仰と魔力を捧げることで

主に種族それぞれが持つ特性を高めてくれる奇跡をお授けになるわ」

「永続の能力上昇魔法のようなものだ」

そういったヴァイスをじろりとミルクがにらんだ

「ヴァイスさん、神都でそれ言ったら異端審問官か神殿騎士団がすっ飛んでくるわよ

神の奇跡を人間の使う魔法と一緒にたにすることは何事か、ってね」

「……以後気をつけよう」

ヴァイスは動じた様子も無くそういった。

「ヴァイスさんはどんな神を信仰してるの？」

私は鳥神フィアルヴェトレの信者だけど」

「……シエウォースタだ。一番性に合う」

「あー。確かに、知性と冷静さを統べるシエウォースタ信者っぽいなあ……」

他の種族の神を信奉してるのは珍しいけど

人間族が竜神族の神を信仰しちゃいけないなんて決まりはないし」

基本的には種族に付いた神を信仰するのが一般的というわけか。

「なるほどなあ……」

「雪平君もバスターを続けるつもりなら神の加護を受けたほうが絶対いいって

悪いこと言わないからさ。教会の神像に魔力を捧げて祈るだけだし大体必須みたいなものだし」

ミルクはそう勧めた。

「そろそろ使えるべきものを使ってもいいか……」

基本的な動きは身についた頃だし

神の加護で底上げされた能力を自らの実力と思って慢心することもあるまい

雪平、神を信仰するかどうかは任せる、好きにしろ」

「わかった、その内行って見ることにするよ

そういえばヴァイス、このさっき倒したスラの核を

登録所みたいな所に持ってけばバスターに成れるんだよな。

小さすぎてダメとか無いよな？」

「登録所ではなくバスターズギルドだな、問題はないはずだ」

「魔法抜き加護抜きで連携してマリウスと戦える実力なら十分よ……」

落ちたら誰がバスターになれるんだか……」

「じゃあ、速く行こうぜ!!」

随分と掛かった気がするがようやくバスターになれそうだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5764z/>

---

オープンドシール

2011年12月27日22時49分発行